

花崎 一郎 名誉教授ご逝去



平成元年3月撮影

略歴

昭和11年7月19日生まれ
 昭和35年 東京大学工学部応用科学科 卒業
 昭和37年 東京大学大学院工学系研究科修士課程 修了
 昭和40年 東京大学大学院理学系研究科博士課程(物性研) 退学
 昭和40年 理化学研究所 研究員
 昭和41年 理学博士(東京大学)
 昭和47年 大阪大学理学部化学科 助教授
 昭和53年 分子科学研究所電子構造研究系 教授
 昭和61年~平成3年 機器センター長
 平成9年 分子科学研究所 名誉教授
 平成9年 広島大学理学部化学科 教授
 平成12年 広島大学 定年退職
 平成27年3月11日 逝去 享年78

花崎先生の教え 馬場 正昭 (京都大学大学院理学研究科 教授)

分子研の電子状態動力学部門で技官を探しているとのことで研究室のドアを叩いたのが花崎一郎先生との初めての出会いでした。どういう研究をしたいのですかと尋ねられ、一時間ほどだったでしょうか。面接という設定だったので、アピールまみれの話は私は熱っぽく語ったのですが、花崎先生は笑みを浮かべながら冷静に、青二才のたわごとなどどこ吹く風といった様子で議論をしてくれました。ものすごく切れる人だなと直感し、一緒に研究できたらいいなと心から思いました。縁があってそれから5年、花崎先生の懐の深さのおかげで私は充実した研究生活を満喫できました。研究には厳しく、私事では優しく、研究者志望の若い駆け出しにとって花崎先生は理想的な師でありました。

当時の花崎グループでは、赤外多光子解離を中心に研究が進められていたのですが、先生の粋な計らいで、私は新たに超音速ジェット分子分光を始めました。まったく経験がないくせに実験装置をゼロから作り、レーザーも一筋縄ではいなくて、なかなか結果が出なかったのですが、先生は私を少しも責めることなく、次はこうしたらどうだとか、こういう可能性もあるかもしれないとか、まるで自分で実験をしながら楽しんでおられるように見守ってくれました。一年経ってやっとスペクトルが取れたのですが、有頂天になった私は夜が明けてすぐに先生のご自宅に実験室から電話をかけ、「うまくいったので見に来てください」とお願いをしてしまいました。やがて先生が現れ、「そうですか、取れましたか。」とまた笑みを浮かべながら、一時間ほど議論をしたでしょうか。ねぎらいの言葉とかはなかったのですが、チャートを見ながら何だかんだと。今も鮮明に記憶に残っている、私にとっては至福のひと時でした。

私はそのとき研究室の秘書と婚約しており、その面倒を見てくれたのも、おしどり夫婦の花崎ご夫妻でした。結婚のときには仲人をお願いしたのですが、ご夫妻の仲むつまじさは人もうらやむほどでした。先生が退官されてからも時折ご挨拶には伺っていたのですが、3月に急に亡くなられたのを知らされたのは、ひと月以上も経った忌明け直前のことでした。夫婦ともどもご自宅の鎌倉までお参りに行き、奥様とともにご霊前で掌を合わせていたら、このような昔のことが走馬灯のように心をめぐり、感謝の気持ちと涙があふれました。

私は今も、先生がセンター長を務められていた機器センターで共同研究を続けています。花崎先生と一緒に仕事しているという気持ちを忘れず、これからも実験を楽しみたいと思っています。

花崎先生の思い出 高柳 正夫 (東京農工大学大学院連合農学研究科 教授)

私は、昭和61年10月から8年半、電構造研究系電子状態動力学部門の花崎グループで助手を務めさせていただきました。分子研花崎グループとしては、二代目の助手となります。在任期間中、先生には非常に恵まれた研究環境を整えていただき、多くの興味深い研究に関わらせていただきました。超音速分子線やパルスレーザーを用いた実験が一般的になって少したった頃で、私達もそのような研究を行っていました。先生ご自身も多くの研究課題をお考えになっていましたが、グループのメンバー（スタッフや学生）の提案にも積極的に耳を傾けられました。そして私が在籍していた期間に、振動励起したファンデルワールス分子のダイナミクス、ファンデルワールス錯体を用いた半衝突の研究、アセトアルデヒドの光励起ダイナミクス、メチル基などの大振幅振動のポテンシャル解析と分子間相互作用によるポテンシャルの変化など、多くの研究が行なわれ、それぞれ成果を挙げることができました。少ないメンバーで良くこれだけできたと思います。実は当時グループ内では、このような気相の分子や分子会合体の研究だけではなく、溶液中の振動反応などの非線形現象の研究も行われていました。先生のご関心の広さと実行力は驚異的だったと思います。そんな当時（平成6年4月）のグループメンバーの写真が残っていましたので、掲載します。

分子研在籍中には先生と奥様に、個人的にもお世話になりました。一人暮らしをしていたときには、よくご自宅に食事にお招きいただきました。結婚前後には、励ましやアドバイスをいただき、また宿舎に入れるようにという働きかけまでしていただきました。追悼ページ冒頭の写真は、私の結婚披露宴でスピーチいただいたときの先生のお写真です。



最近は何かとあわただしく、ずいぶん長いことご無沙汰しておりました。急逝の報せを受け、ありきたりながら「もっとお会いしておけばよかった。」と悔やんでおります。ご冥福をお祈りします。

花崎先生と非線形現象の研究 森 義仁 (お茶の水女子大学理学部化学科 教授)

花崎教授は、1989年4月には非線形平衡系現象に関する研究に本格的に着手をし、これに際し、インドから研究員として P. K. Srivastava、国内から流動技官として森義仁が参加した。花崎教授指導のもと、光化学反応と流体の協同現象や非線形平衡系現象として知られる化学振動反応における振動復活現象の実験に並行して、関心事の一つである化学振動反応における光照射効果の研究動向の調査を進めた。その中で、化学振動反応を光照射で制御する試みは報告されているものの、その初期過程が明らかにされていなかったことが分かった。そこで、いくつかの光照射効果が見出されている反応系について作用スペクトルを求めることにより、初期過程を議論する研究の枠組みを作り、その枠組みの中で、まだ光照射効果が知られていない反応系にも応用し、その有効性を確かめた。この初期過程を明らかにすることで初めて光照射が化学振動反応を制御する仕組みを定量的に説明することが可能となり、化学振動反応の光応答研究が大いに広がった。

この非線形非平衡現象の研究には、総研大生として岡崎紀明、関口哲生が、技官として神長暁子が順次参加し、グループの活動も活発になり、その存在を知られるようになると、国内からの共同研究者も増えていき、宿泊施設などの要因も加わって国外からの共同研究者の滞在も相次いだ。ポーランドの Gorecki 博士、チェコスロバキアの Marek 博士、ロシア Agladze 博士や Vanak 博士、ハンガリーの Rabai 博士などである。加えて、研究会やシンポジウムも開催するようになり、国内での研究拠点の役割を果たし、特に、化学、数学、物理学、生物学、医学と多様な分野に渡る非線形非平衡系現象の実験を中心とした、国内にはなかった研究会を開始した。花崎教授引退後もこの研究会は継続しており、今年で24回目を迎える。



日本-ハンガリー
二国間非線形科学シンポジウムでの集合写真